漢法苞徳塾資料	№. 036
区分	総論・レジメ
タイトル	**漢法医学の理解のために**
著者	八木素萌
作成日	1989.04

◎日本での医学的生理学的な常識との関係

◇明治８年以来の国民教育と医学は西洋医学であった。

◇人間機械論と五臓論的人間論

◇解剖学的人体把握および脳神経中心論に対する動態構造論的人身論の違い

◇世界（哲学的意味での）の中でのヒトの位置に関する把握の相違

◇形式論理の世界と辨証法的論理の世界の違い

◎シンボル性の把握と類推そして総合

◇用語の概念の座標軸の変動

◇陰陽は６４通りに、五行は２５通りに変化する。木火土金水の五臓にそれぞれ五行があり、それが五兪穴に五行の関連変化があり、表裏の関係や接続関連もある。
経は１２、陰は心包を加えると６臓、６×２＝１２、１２×５＝６０、陽は６腑、原穴があるので、６×６＝３６、３６×２＝７２、６０＋７２＝１３２となる。
１３２×５＝６６０、６６０に上下や接続を考慮する。十干と十二支の組み合わせは６０通りあり、天干の六経に循環があり、地支の六経にも循環がある。その循環には旺相死囚休の局面がある。この様に見て行くと陰陽と五行との組み合わせの変化は膨大なものである。

◇機能単位のセット、または、共通する性質の幾つかの単位の集合としての臓概念。

◇表象としての五臓に収斂と収束を受ける生理的病理的な現象の把握。そこに見られる、独特の概念、理論の操作、運用の仕方。

◎定性化と定量化と検証

◇定性化を判りやすく、定量化の工夫の必要、検証方法の視覚化の必要と問題点

◇仮説に基づいて仕事をし、予期の結果が得られたならば、その仮説は正しいと認識される。

◇重要な基本的症状を段階的に定性化してダイヤグラム化する作業の必要と問題点。

◇高感度センサーや超増幅装置をうまく組み合わせる事によって、新しい段階が切り拓かれるだろうと思える。しかしそれは、漢法医学をその精神と方法論と理論とに精通した臨床家を基軸としたチームによって行わなければ、真の成果は期待できないだろう。明治の初中期に西洋の技術や制度や学問その他を学び取り入れるに際して、『和魂洋才』の立場、精神が強調されたように。

◎実際に存在し現象している事が、既存の理論や知識で説明できないときに、無視したり一笑に付したりパワーで押し壊そうとする態度は、科学的精神とは無関係なものである。

◇『扁鵲六不治論』『郭玉四難』にみられるのは「医の心」である。

◇未知なものに対する態度について

◇様々な治療手技手法に対する態度について

◎チャレンジしよう

◇臨床経験の中には極めて貴重なものが生じる。これは墓の中まで持って行かない様にしよう。

◇思いもかけない反応は記録し、分析しておこう。

◇未解明なもの、もっと平明にできるものを、自分の課題として取り組むようにしよう。

◇安直なパターン化を避け、あらゆる事態に対応できる力を身につけ、また、壁に突き当たったときにそれを突破できるだけの準備をして置こう。